

ハートは心臓である

笠原
健一

万引きを見た。言い訳するわけじゃなく、僕が「その行為」に気づいたのは、スズキ商店を出たあとだった。寒い季節だった。ミナカミの着ていた白いダブルコートが記憶に残っている。もう一人、スギという同級生が一緒だった。僕は上下、中学校指定の青ジャージ、白いスニーカー、という格好だったと思う。胸には大きく名前を書いた布が張ってある。それが余計に僕を混乱させた。

店を出て十メートルほど歩いたところで、ミナカミは急に立ち止まった。僕が振り返るとスギもミナカミの横で静止していた。「どうした？」と戻ってきた僕の顔を、ミナカミはじっと見た。コートのすき間に手を入れ、ミナカミはそこからゆっくりイチョゴチョコレートの箱を取り出した。「万引きだ」僕は瞬間に理解した。心臓の一部をつかまれて、しばらくするような痛みを感じた。理科の時間に習った。動脈と静脈。人間は、血液の中に酸素を循環させて生きている。わじづかみにされてしまった僕の心臓から、黒いあざが染み出していく。

目の前では、ミナカミがまるで手品みたいに、クッキーやらポテトチップスやら箱入りの菓子を次々と取り出し、隣のスギに手渡していく。スギも「共犯」だったんだ。少量の菓子と文房具を扱っただけの狭いスズキ商店の中を僕らが一周する間に「犯行」はおこなわれた。おまけに、ミナカミは、みずから菓子を二つ三つ選んで、ちゃんと購入していたのだ。店主の気をそらすためか、それとも、万引きがばれそうになったときの言い訳のためか、いずれにしても、保険をかけておいたわけだ。

頭が目まぐるしく回転する。ミナカミはこちらを見ている。スギもこちらを見ている。どうしてこっちを見ているんだ。いったい、何を言っただけなんだ。

ミナカミの気持ちなんてどうでもよかった。ただ、その場から逃げ出したかった。そして、僕は逃げ出した。文字通り、「逃げる」だ。テレビゲームみたいだね。かなわない敵にぶつかったから、あ、やべ、逃げるべ。ただだっ。成功。みたいな。

断じて言っ。万引きをすることがスリルであったり、ましてや、「勇気を試すこと」であることは絶対がない。そんなことで試されるものは、「勇気」とは言えないだろっ。

でも、僕は、あのとき、「ミナカミとスギを注意する」という「勇気」。「十メートル戻ってスズキ商店の店主に事実を告げる勇気」等、勇気を持って行動するチャンスを与えられていたんじゃないのか、とも思う。「当時、中学生だった自分には無理だよ」と言い訳を考えることもできる。でも、じゃあ、今の自分ならそれが可能かというっ、

やっぱり逃げ出してしまいそんな気がする。このとき受けた胸の痛みと、そして「勇気」という言葉が、その後の僕にずっとついて回ることになる。だから、僕は、「こうして君に、」十三歳の僕自身にあてて手紙を書いている『んだ。ちょっと長くなってしまつと思つけど、がまんして読んでほしい。この「万引き事件」は、たぶん君が十四歳の頃に起こるんじゃないかな。

ミナカミとスギと三人で過ごしたのは、後にも先にも、これが最後だつたと思つ。普段はそれほど仲が良くなかつたのだから。

きれいさっぱり逃げ出したはずの僕は、この問題にフタをしてしまった。親にも先生にも話さなかつた。もちろん、スズキ商店の店主にも、だ。僕もだんだん大人になっていくにつれ、頭の中ではある程度このときの出来事を整理して受け止めることができるようになった、と思つ。でも、心臓を通じて染み出した黒いあざだけは、なかなか消えない。

二十歳になつてから同窓会をした。Aというクラスメートの話題になつた。本人は出席していなかつた。「アイツ、中学んとき、すげえいろいろパクつててさあ」という話だ。パクる、というのは、この場合、万引きするという意味だ。「俺、ソイツン家に遊びに行ったんだけど、シャンプーとかヘアリンスとか、オマエこんなに使つはずないだろ、って数がズラーって並べてあるんね。もつ、盗むこと自体が趣味なんよ」、「あはは」僕は別に面白くない。でも、心臓は痛まない。頭でちゃんと理解することができるからだ。Aはきつと万引きという行為や、盗んだ商品を部屋に並べ、それを友だちに見せるということを通じて、自分の、何か、心のすきまのようなものを埋めていたのだから。Aについての話はまた続いている。「この間なんか電子レンジ盗んだらしいぜ。エレベーターの横に置いてある在庫をそのまま一個持ってきちゃつたらしい」「ははは」「さすがにそれは想像するとおかしかった。でも、もちろんいけないことだ。

食事をしながら何気なくテレビをつけっぱなしにしていると、若い女性タレントの「わたし、実は、昔、万引きしちゃつたことあるんです」「みたいな「告白」が急に耳に入ってくるのがあつて、そついつときは、やっぱり、急に胸が苦しくなる。

そのうち、新聞の投書欄に「過去の万引きを話題にして盛り上がるとは、けしからん」というような意見がだいが寄せられ、テレビに出る人たちはそついつ発言に気を付けるようになった。僕は、ふいをつかれることが少なくなつた。

もちろん、このほかに、胸が痛むことはたくさんあつた。これからだつて、もちろんたくさんあるだろう。

でも、心臓は、胸は、痛むだけのためのものじゃない。嬉しさや期待で高鳴ることもある。喜びや興奮で鼓動が速まることだつてあ

る。僕だつてそういう経験を何度もしてきた。

僕は万引きをしたことが無い。したいと思ったことも無い。大学では心理学を学んだ。「万引きを繰り返す人の心には、すき間があるのです」「じゃあ、オマエはどうなんだよ」そう、僕は、その痛みから目をそらすために、何でも頭で考えて、言葉や理屈で押し込めようとしていたのかもしれない。それこそが僕の本当の「逃げ」だったのかもしれないね。

なんだか、じめじめした話になっちゃった。安心して。今ではちゃんと分かっているよ。嬉しいことも悲しいことも、ちゃんと受け止められるようになってる。だから大丈夫。

そのための、とっておきの「おまじない」があるんだ。次はその話をするね。

2

拝啓。お元気ですか。さつきもちよつと書いたけど、これは、未
来の僕、つまり二八歳の僕から、十三歳の僕への長い長いお手紙で
す。

十三歳の僕へ。どんな夢がありますか。なんて、かっこいいね。
でも、だいたい分かるよ。今、僕は実家に住んでいて、おまけに時
間がたつぷりあります。だから、押入れの奥の段ボール箱を引っ張
り出してきました。昔の文集とかノートとかね、たくさん出てきた
よ。そついろいろのを眺めたり、ときにはじっくり読んだりしているう
ちに、いろいろ思い出したのです。

それにしても、二八歳の僕にそんな時間があるのはおかしいよね。

僕は今、ずる休みをしています。

大学を卒業した僕は、コンピュータの会社に就職した。システム
エンジニアという仕事だった。大学に入った頃は、まさか自分がコ
ンピュータの会社に就職するとは思わなかったよ。

僕は大学で心理学を学んでいた。授業はとても面白かった。でも、
それ以上にずっと以前から持ち続けていた、「言葉」というものへの
興味がより強くなつていったんだ。

世界がどんなに、もやもやしていても、ひとつひとつのもやもや
に対して、ていねいに言葉を探して当てはめ、順序良く並べ、それ
らをきちんと伝えることができれば、もやもやは少しずつ晴れてい
くと信じていたんだ。

そして、もし、そのもやもやが誰か力弱い人や、立場の苦しい人を悲しませているのなら、言葉が誰かの支えになると思っていた。人を救う、とまでは言わないけれど、具体的な誰かと誰かをつなぐことができる、手を取り合うことができる、と本気で考えていた。

僕は今でもそう考えている。「ついでに、『十三歳の僕』にも手紙を書いている。本当は、「二八歳・ずる休み中」だから、あんまり、偉そうなこと言えないんだけどね。でも仕方ないね、そう考えてしまっただもの。

そうそう、「ずる休み」の話だったね。

仕事は楽しかった。順調だった、とも思う。僕はもともとコンピュータが好きだったし、たとえば、困難な仕事をやり遂げたときは、「やったぞ」という思いが胸の中にひろがっていくのを感じる事ができた。小さな積み重ねが僕に自信を付けていった。職場の人間関係も、自分なりにうまくやっていったつもりだった。

それなのに、それなのに、ね。

僕はある日、たくさんの人と、いつぺんに会うのが怖くなってしまった。頭の中が真っ白になってしまっただ。テレビも見なくなっただし、新聞も読まなくなった。電車に乗るときには、両耳のイヤホンが手離せなくなった。自分の好きな曲、同じ曲をリピート再生で何度も何度も聞き続けるんだ。「外」が自分の頭の中に入ってこないように。

コンピュータ相手の仕事だからといって、人と接しないで済むわけがない。僕は数日のあいだ、何とか、がまんして仕事をした。そして、今、自分の休暇が何日残っているのかを確認した。

オフィスにはスケジュールを書き込むホワイトボードがある。その脇に、ひとまわり小さなボードが、来客などの目に触れないように置いてある。休みを取りたい場合、社内みんなが分かるように、あらかじめ、そのボードに記入するんだ。

僕は水性のペンを手にとり、翌日の日付の部分に小さく黒丸をつけた。そこから横へ、残りの休暇の日数分だけ線をまたいで引き、終わりにまた小さく黒丸を書いた。忘れず自分の名前も書いた。もちろん、そんな自分勝手な休暇の取り方が許されるはずがない。でも、僕は久しぶりに頭のむくみが取れたような気がした。

「頭の中がゴチャゴチャするんです」知人のすすめで行くことになる心療内科、という病院の診察室だ。僕は思ったままを正直に言っただ。

眼鏡をかけたドクターの声は低く、あこには短いひげが生えている。ひげは場所によって生えていたり、いなかったりした。また、茶色のひげのところどころにあわい灰色が混じっていた。それが僕を安心させた。

ドクターとはいろいろな話をしたが、とりあえず、会社に診断書を提出しなければならぬ、ということになった。診断書を書くためには病名が必要だ。僕の「病気」は、つまり、「たくさんいるんなことがいつぱんに頭の中に入ってくると、もてあましてしまって、いつぱいになってしまって、苦しくなる」病気、ということになった。

人間の頭はテレビではない。ましてや、あなたの場合、どこかにぶつけたとか、頭の機能の一部がショートしてしまった、というわけではない。だから、実際に頭がゴチャゴチャになったり、真っ白になったりすることは無い。だから、もし、そういうことが起こったとしても、それは、心理的、気持ちの中での出来事なんだよ。

ドクターは僕を傷つけないように、ゆっくり時間をかけて説明してくれた。うれしかった。僕は説明を聞く前から分かっていた。これが「気持ちの問題」であることを。大学の授業で聞きかじった言葉が浮かんで消えて、そのうちのいくつかが、はりついたまま残った。「たぶん、俺は、そういう心の病気になっちゃったんだろ」「そんな僕の思いをよそに、ドクターの静かな説明は続いていた。それはとても短い時間だったのかもしれない。でも、僕は、ドクターの言葉をさえぎって、立ち上がってしまいたいと何度も思った。「先生、お心づかい、ありがとうございます。よく、分かりました。気持ちと、心のことなら、あとは、もう、自分で、どうにかするかありません。少しは知識もあります。それに」言葉をのみこんだ。知識なんてあるわけない。これから、どうしようというんだ。心も、気持ちも、いったいどこにあるんですか、先生、教えてください。僕の頭のゴチャゴチャを治してください。泣き出したい思いをかみしめてこらえた。

心や気持ちの形や位置が明らかでなくても、ドクターは、ここにおられるし、病院もあるし、僕は診断書を書いていただくことができただ。封筒に入って、のり付けされているので中を見ることはできないが、僕はその封筒を何度も表にしたり裏にしたりして眺めていた。

スケジュールボードに書き込まれた無茶な休暇希望および書面での休暇願のうわさは、直属の上司ではおさええることができなかった。僕はもつとずつと上のエライ人呼び出され、実家に帰って休むように言われた。僕はそのとき、会社の寮に入っていたのだ。まあ、これでもう会社に残るのも難しくなつたと思つたが、心は軽かつた。急なことで、チームの仲間や、上司に迷惑をかけてしまうことについては胸が痛んだ。だけど、僕は言われるまま、実家に帰つた。

今、朝の九時半だ。母もパートに出ている。家の中にはもう誰もいない。テーブルの上に母が残しておいてくれたパンとス

ープがある。僕は遅く起き、スープをあたたため、パンを焼き、冷蔵庫から出したジャムをぬって食べる。歯をみがき、顔を洗い、ひげをそり、そうしてまた、パジャマのまま、布団の上に横になっている。

僕は中学から高校にかけて、ずいぶんたくさんのお休みをすることになる。僕の両親、ということは君の両親でもあるわけだからよく分かると思うけど、僕が「今日は学校を休みたい」と言えば、両親は何も聞かずに許してくれる。明らかな「ずる休み」の場合でも、そのまま休めちゃうよね？

建て売り住宅地のこのあたりは、外も静かだ。たしか高校生のころは、こうして布団に横になってラジオを聴いていた。世界のどこかで戦争が始まったというニュース。アナウンサーが刻々と告げる地名から、僕は地球儀の上のだいたいの位置しか想像できない。それでも、僕は、砂漠に並べられたミサイルの列、戦闘機に照りつける太陽の強さを思った。

直属の上司が実家に来た。僕と、母が応対した。上司は申し訳ない、という顔をしていた。良い人なのだ。迷惑をかけているのはこっちのほうだ、と僕は思った。実際、口に出してあやまった。「もうしわけありません」「正直な気持ちだった。

仕事の上で、よく面倒を見てもらった。仕事が終わると、一杯誘ってくれることもあった。だから、とても悲しかった。

上司は「さらにずっとエライ人」から、僕のことを「うまくまとめる」「ように指示されてきたに違いない。これも「仕事」なのだ。忙しい中、遠方から、はるばる電車を乗り継いで、この街までやってきた。

会社のせいで僕が心の病気になった、ということになると、いろんなことがややこしくなる。僕も、それを望まなかった。結局、僕は自らすすんで会社を退職する、という形になった。

僕が書類にサインをしても、上司はイスを動かなかった。上司の視線は、僕と、もつとずっと遠くとのちよつと中間に、長い間とどまっていた。僕も母も何も言わなかった。僕が不用意な言葉でその沈黙を壊してしまう前に、彼は席を立った。

待合室はちよつと良い温度に保たれている。今日は二週間にいったぺんの通院の日だ。予約制だから、待合室の中はいつも落ち着いている。それぞれ小さく仕切られた、それでいてやわらかくて腰の深いソファに座って順番を待つ。テーブルの上には、ポットが二つある。備え付けられた紙コップで、温かいお茶と冷たいお水、好きなほうを飲むことができる。トイレも清潔だ。静かな音楽が流れている。時折、マイクのこするよつな音が聞こえ、ドクターの声で名前が呼ばれる。

診察室に入ると、ドクターはいつも正面に座っている。僕は、お願いします、とあいさつして、ドクターと向かい合って腰かける。部屋にはドクターの机の他にも、いくつかの棚や小さいテーブルなどがある。象をかたどった置物が目立つ。

「大丈夫かい？」ドクターの眼鏡の奥にしわが見える。いつの間にかドクターは僕の横のイスに腰かけている。声をかけながら、ドクターは、自分の右手のゲンゴツで僕の胸をゴツゴツと小突く。「大丈夫です」僕はそうこたえる。気がつくくと、また、ドクターは元の位置に戻っている。僕はお礼を言って部屋を出る。

帰り道、気持ちをリラックスさせる薬とかなんとかの入った袋をリュックサックの中にしまい、再び歩き出しながら考える。そうして、ふと、自分のゲンゴツで自分の胸を叩いてみる。ゴツゴツ。けっこう大きな音がするものだ。

ドクターの「ゴツゴツ」は、おこなわれるときもあったし、おこなわれないときもあった。あるときは、ボクシングのジャブみたいに、「冗談まじりにまっすべゴツンときた。ドアをノックするようにゴンゴンゴン、と叩いてから、目じりのしわをさらに深くさせる」ともあった。

仕事を辞めてから半年が経っていた。

僕は夜、眠りに就くときにも不安におそわれるようになった。現在の自分への不安、将来への不安。僕は奥歯をしっかりとみ合わせ、タオルケットや毛布を丸めて抱え込む。身体をかたくして眠る。朝起きると、体のあちろこちらが、きしんだ。

ある夜、僕は、ひとり、夜の布団の上で、例の「ゴンゴン」をやってみた。やっぱり、自分自身の中に響く音は思いのほか、大きく感じる。

手のひらを胸にあててみる。心臓が脈打っている。耳を澄ませば、鼓動が体中をめぐっているのが分かる。

動脈と静脈。今、僕の手のひらは、もっひとつ、体の外側にも、しっかりと循環の環を作っている。夜を、僕の中を、ぬくもりが伝わっていく。

静かだった。今なら、なんでも大丈夫のような気がした。痛いことも苦しいことも悲しいことも、それだけじゃない、嬉しいことも楽しいことも泣きたいこと笑いたいことも、ぜんぶぜんぶ、自分の循環の中に放り込んでしまいたくなった。それでいいんだ。それでうまくいく。僕の感情は僕の血液に乗って、僕の体をかけめぐらるんだ。

そのとき、つながったんだ。ドクターの「ゴツンゴツン」の意味が。

『ハートは心臓にある』んだ。

それ以来、人と会ったり、電車に乗ったりするときなど、不安におそれそうになると、僕は、こつそり、このゴツゴツをやることにしている。できないときは、手をあてるだけでもいい。気持ちを心臓に集中するだけでも、ずいぶん落ち着くことができる。

僕は、このおまじないのことをドクターにたずねたりはしなかった。でも短い手紙を書いた。相変わらず通院は続いているけれど、ドクターはおまじないのことについてはもちろん、手紙についても全く触れない。ドクターのもとに手紙が届いたのかどうかも分からない。

僕は、病院に行く前、鏡で自分の顔を見る。顔色が良くなってきたと思う。だからかもしれないけれど、ドクターから直接の「ゴツン」を受けることは無くなった。

3

「数学が得意だったの」

信号が青になり、僕とフクオカさんも歩き出した。渡る車線の数だけじゃなく、左右にもずつと広い横断歩道だ。僕の住む、「大学から北へ向かって電車で片道一時間十五分」の実家あたりでは到底見られない。僕はフクオカさんの声を聞きもらさないように、前かがみになって歩く。

フクオカさんとは、大学の授業で知り合った。彼女は国文学科だった。大学一年生や二年生のころは、「一般教養」といって、学科が違って、一緒に授業を受けることがあるんだ。

フクオカさんは、普通の大学生で、普通の女の子だった。外見も「ぶつつ」だった。でも、持っている「言葉」が僕をひきつけた。すぐ好きになった。見た目がかわいい女の子はたくさんいるけれど、言葉が輝いている人なんて、なかなかいないでしょ？

小柄で、身のまわりのものはいつも体になじんでいたという印象がある。でも申し訳ないけれど、人混みに紛れてしまったり、うまく見つけるのは難しかったと思う。

都内の、ある私立女子高校の出身だった。僕は本屋で、その高校の入試過去問題集を手にとった。難しい。特に、数学の問題がほとんど解けそうになかった。

秀才のフクオカさんは、その数学の力を大学入試に使うこともなく、日本文学を学ぶためにここにいる。しかも、学科は違っけれど、僕と同じ大学にいる。『物語』について研究したいの「フクオカさんは言った。考え方の基準が違うのかもしれない。

普通の大学生であり、そしてなにより普通の女の子であるフクオカさんは、よく食べ、よく笑い、よく遊んだ。そして、そのぶんどこかで泣いていたのだと思う。

とにかく、僕とフクオカさんは、ともだちになった。でも授業であって言葉を交わすときを除くと、ふたりにはあまり共通点が無いように見えた。

僕はアルコールに弱かったし、大勢の中で自分の話をしたり、うまくあいづちを打ったりするのも苦手だった。車の免許も持っていなかったし、テニスもスキーもできなかった。当時、僕は普通の大学生でも、普通の男の子でもなかったんだ。もっとも「ふつつ」なんて基準は本当はどこにもないんだけどね。

そんな「ふつつ」ではない僕を、フクオカさんは、ときどき外に誘ってくれた。ふたりで映画を観に行くことが多かった。

待ち合わせの場所に、フクオカさんは、いつも時間より少し遅れて現れた。行き交う人たちの中から、「こんにちは」と顔を出してそこにいる。帰るときも、「さようなら」のあと、そうやってすぐに街に紛れてしまう。

一時間十五分の電車で揺られ、すでにシャツがしわだらけの僕をよそに、彼女はすずしい顔で劇場へ向かう。

今日の彼女は、「よそいき」なのか「おでかけ」なのか、いつもよりオシャレをしていた。流行にうつとい僕にだって分かる。でも、それをうまくほめる方法を、当時の僕は持っていなかった。それにきつと、フクオカさんも、僕に対してそんなことは期待していなかったと思う。

あと記憶にあるのは、いつもより、かかとの高い靴、そして、くちびるに引かれた真っ赤な口紅。はじめのうちは気になって、フクオカさんの口元ばかり見ていた。うーん、僕は大学にいる間、何度かフクオカさんの赤い口紅を見たけれど、似合わないと思うなあ。

ごめんね、フクオカさん。

一緒に観た映画の内容は、ほとんど覚えていない。食事をしたり電話をしたり、ずいぶんたくさん話したと思うんだけど、その中身もすっかり忘れてしまった。ただ、ありきたりな表現だけど、僕の心臓はいつもドキドキしていた。フクオカさんの、ひとこと、ひとことに浮いたり沈んだりしていた。肝心なときは頭でっかちで、言葉ばかりが空回りしていた。

「夢があるの」フクオカさんは、よく、そう話してくれた。どんな夢なのかを、具体的にたずねることはしなかった。その話をするとき、いつも、フクオカさんの瞳はずっと遠くのどこかを見すえていた。その視線の定まる位置に僕が入っていないのは明らかだった。それが悲しかった。

話をしていくうちに、ふたりの共通の楽しみは「手紙を書くこと」であることが分かった。さっそく住所を交換し、文通が始まった。学年が進むにつれ、学科の異なるフクオカさんとは大学で会う機会も少なくなったが、手紙のやりとりは続いた。

卒業も近くなつて、僕は自分からこの穏やかなやりとりを壊してしまう。いつもの返事ではなくて、ラブレターを書いたんだ。心をこめて。二枚の小さな便せんの前で、思いと言葉が行ったり来たりした。

フクオカさんも困つたと思う。しばらくたつてから返事が来た。やっぱり小さな便せんだった。

そうやってふたりのつながりは終わった。その後、大学の仲間が大勢集まる機会があつて、そこで一度だけフクオカさんを見かけた。でも、声をかけることはしなかった。

僕は、「失恋」した。その後、いろいろな女性に出会って、付き合つたり、まあ、また、別れちゃったりする。今、彼女がいるかどうか、そりゃ秘密。とにかく、けっこつなんとかなるから大丈夫だよ。自分で言うのもなんだけど、自信を持ってね。十三歳の僕。

とにかく、僕は歳をとっていった。もう連絡をとることは無くなつていたけれど、フクオカさんも、どこかで歳をとっていたと思う。ちよつと前置きが長くなつてしまつたね。この話のポイントはここからなんだ。

フクオカさんのことは本当にたまにしか思い出さなくなつて、僕自身も「ずる休み」のことやらなんやらで、はあ、これからどうしよう、つてときに、ふいに、彼女から手紙が来たんだ。

フクオカさんから送られてきた封筒は、ポストの中でしつかり存在感を持つていた。手に取ると、だいぶくたびれてもいた。長い旅をしてきたし、それに、途中でずいぶん迷子になつちやつたよ、という様子だった。

クリーム色の封筒は遠い国から来たものだった。切手も消印も。

ドバイ。フクオカさんは、ペルシア湾沿いの貿易都市、ドバイの日本人学校で小学校の教師をしていた。

嬉しかった。フクオカさんの夢は、かなつたんだ。

学生のころ、僕はフクオカさんといういろいろな話をしていくうちに、「フクオカさんの夢っていうのは、学校の先生になること、それも海外の日本人学校で教えることなんじゃないかな」と感じていたんだ。フクオカさん、大学が長い休みに入ると、居酒屋のバイトでためたお金をはたいて、いろんな国を旅していたものね。

返事を書くよ。

だから、この手紙は、十三歳の僕への手紙であると同時に、フクオカさんへの手紙でもあるんだ。なんだかややこしくなつちやつて

ごめんね。

拝啓。フクオカさん。お元気ですか。お手紙ありがとうございます。フクオカさんが学校の先生になった、ということは風のたよりに聞いていたけれど、まさか次はドバイとはねえ、やっぱりフクオカさんはすごいや。

まず学校の先生になる。その中から海外の日本人学校教員選考試験を受けてパスする。希望者が多くて、とつてもとつてもたいへんだ、と聞いたことがあります。

フクオカさん、おめでとう。

僕は本当に嬉しいです。

夢があつて、しかるべき努力をして、それをかなえたフクオカさんのことが嬉しいです。

ドバイの空は青いですか。

もちろん、フクオカさんの「夢」は「試験に合格すること」「じゃなくて、「先生になること」だったんだよね。

アラブシュチュウウコクレンポウの空の下で、子どもたちと一緒に学び、笑つフクオカさんの姿を想像する。うーん、僕にはスケールが大きすぎるよ。でも、ほんとうに、よかった。

フクオカさんの近況報告は簡潔なものだった。手紙を受け取つてすぐに、僕はコンピュータのネットワークで彼女の勤める日本人学校を調べてみた。日本向けに現地の様子や、学校の活動などが紹介されていた。「3年生担任」の欄には彼女の名前もあった。だけど、僕はすぐにコンピュータのスイッチを切り、世界地図で位置を確認しながら彼女からの手紙を繰り返し読んでいる。

わざわざ手紙を書かなくても、コンピュータを使えば、瞬時に言葉のやりとりができる。でも、フクオカさんは、手紙をくれた。

枕元に紙片を置いて、そこに言葉を書き込んでいく。分解と統合。言葉の断片はうまくかみ合わない。ごめんね、フクオカさん。今は、頭の中が「ゴチャゴチャ」して、うまくまとめられないんだ。気持ち揺れてしまつて、いっばいになつてしまつんだ。ずいぶん長い手紙になつてしまった。

フクオカさんを勇気づけたいと思つて書いた。今はもちろん、学生のころだつて、とにかく、僕にそんなことできるわけがない。

僕は、君の背中を押すことで、自分の背中を押そうとしているのかもしれない。

たとえ、そうだとしても、僕は、この手紙を送るよ。

かつて、フクオカさんはいつも、何かを問いかける相手として、僕を選んでくれていたと思つたら。

ふたたび十三歳の君へ。
まずは、君に伝えよう。
君は、君であるだけで、じゅうぶん、価値があるんだ。
そのために手紙を書いていると言ってもいい。

十三歳から二八歳までの間に、僕は多くの人に出会う。もちろんこれからだって、いろいろな人に出会っていききたい。

僕はいつも、その幸運な出会いに感謝し続けようと思う。

たくさんの人と、たくさん話をした。僕が聞いてもらったこともあつたし、自分の知らない世界の話を聞かせてもらったこともあつた。

ふたりで話すことが多かった。年上の人、年下の人、男の人、女の人、立場も、関係なかった。いつもはみんなの前で明るく振舞っている人も、仕事の顔は厳しい人も、スカートの丈を短くして、長いまつげを付けた女の子も、僕の前では静かに話してくれた。

「人は誰でも、小説を書けるっていうよね。みんな、それぞれ、ひとつずつ自分の人生っていうストーリーを持っているから」ある先輩がくれた言葉だ。

ひとつの文字をじつと長いこと見つめていると、いつの間にか、ぼやけて、もとの意味や読み方を思い出せなくなってしまふことがある。

向かい合つて話をする。自分と相手との距離感が近くなったり、遠くなったり、次第に、ぶれて、分からなくなってしまふようになることが何度もあつた。

「ありがとう」それは、かろつじて、僕が素直に口に出せるようになった言葉だ。もちろん、大切な言葉だ。みんな、ありがとう。もうひとつ、ずつと感じていたことがある。でも、僕は、それと言わなかった。駅で別れるとき、受話器を置くとき、手紙に封をするとき、いつも、何か言い忘れたような気がしていた。

思いは、心に、ひっかかったまま残つた。ときがたつにつれ、それは少しずつ、形に、言葉になっていった。

相手に伝えることが、正しいか、間違っているか、分からなかった。伝えることで、誤解されてしまふのが怖かった。

でも、今は、思う。

そんなこと、どうでも、いいよ。心で、ハートで感じたこと、思ったこと、「今」伝えなくちゃ。

僕にかかわってくれる、みなさまへ。ちょっと遅くなつてしまいましたが、どうしても伝えたいことがあります。

ほんとうは、感じたそのとき、その場で言えたら良かった。でも、ちよっと勇気が出ませんでした。今度からは、まっすぐ言います。

『あなたは、あなたであるだけで、じゅっぶん素晴らしい！』

未来は君のものだ。

可能性は君の中にある。

もう気づいているかもしれないけど、僕はここで、君に「ごめんなさい」をしなくちゃいけない。

「今まで話してきたことは、ほとんど全部、作り話 なんだ」

僕はシステムエンジニアにはならないし、心療内科のお世話にもならないよ。フクオカさんも実在はするけれど、学校の先生じゃないし、アラビア半島には、いないんだ。

これまでの未来の話は、僕が、今まで出会った多くの人から聞いた体験や事実に加えて、つぎ足して作ったものなんだ。

もちろん、全く、「こそ」「っていつわけでもない。

僕は十三歳の君から現在の自分へ向けて一本の線を引いた。僕の性格や、自分の身に起こったことを考えながら、その線に沿って、ストーリーを考えていったんだ。

ともだちにはプロのミュージシャンもいるけれど、「僕は、プロのギタリストになりました」って書いても、君は最初から信用しないでしょ？

未来が、うそだって分かって安心した？ 知ってる。君には夢がある。大丈夫。なろうと思えば、君は、何にでもなれる。

それでも君は納得しない。この手紙が書かれた理由。この長い手紙の中には三つの本当がある。それを今から説明するね。

(本当のこと)

僕が僕であること。

この手紙がフクオカさんのもとへ送り届けられること。

ハートは心臓にある、ということ。

については、いいよね？ 今、たしかに君はこうして僕の手紙を読んできています。それは間違いない事実なんだ。そして、に ついても、長くなってしまったぶん、手紙を入れた封筒は、重く大きくなってしまっただろう。それでも、封筒は人から人の手を渡り、何台もの船や列車を乗り継いで、それでもいつか、フクオカさんのところに届く。

についで。もう一度、胸に手をあててみよう。心臓の鼓動を感じるよね。どうしても苦しいときは、ゴッソングッソ、ハートの扉をノックしよう。嬉しいことも悲しいことも、ひとつひとつ扉を開いて受け入れる勇気を持とう。

「勇気」については、やっぱり話しておかなくちゃいけないと思う。

さつき僕は、「未来のことは教えない」と言っただよ。でも、君はこれからの自分のことを予感できると思う。だって、君は僕だもの。

君は弱い。特に暴力に対して臆病だ。ときに、暴力は、弱い者の匂いを敏感にかぎつける。たくさんブンなぐられるだろうね。学校の廊下で、校舎の陰で、街で。ともだちがなぐられていても、助けに入れない。怖くて、体が動かないんだ。あげくの果てには、自分を助けに来てくれたともだちがなぐられているのに動けない。そして君はまた、逃げ出すんだ。

理不尽な暴力を前にして、君がどんな行動をとるか、それは分からない。何が正しいことなのかさえ、誰にも分からないことだからだ。残念ながら、世界は今も、もやもやしている。しかし、不当な暴力で誰かの人生が、ゆがめられてしまつようなことは、あつてはならない。本当に必要なことは、相手を、自分を、赦すことなのか、もしれない。それは、とても、とても、むずかしいことだけれど。

僕の言葉が君に届きますように。大きく息を吸って胸に手をあてるんだ。勇気が欲しいなら、持ちたいと願えばいい。

人は、わらつかもしれない。「届くはずがない」と。タイムカプセルどころじゃない。この未来から過去への手紙を。

だから、僕はこの手紙の最後に、強く強く祈ろうと思う。世界中のあらゆる場所、あらゆる時代で、人々は祈り続けてきた。運命という大きなうねりの中で、ひとりの人間にできる最後のこと、それは祈ることがもしれないと、僕は思う。

祈ろう。祈ることは無駄じゃない。君のために、君の勇気のために、君につながるすべての人のために、そして僕を支えてくれるみんなのために。

『ひとつでも多くの幸せが訪れますように』

敬具

未来へ

一八歳の僕

十三歳の僕 様

フクオカサチコ 様

もう、おしまいだと思った？ これは、君への手紙であると同時に、過去から未来へと続く物語なんだ。物語は間もなく、ハッピーエンドを迎える。

舞台にはカーテンコールがある。だから、観客はすぐに現実に戻って、良い気分で家に帰ることができる。そして、僕のハッピーエンドには終わりが無いんだ。だから安心して眠りに就くことができる。物語は明日も続いている。僕も、フクオカさんも、そして君も、明日もちゃんと存在していて、泣いたり笑ったりしながら、「それぞれの道」をあゆんでいく。必ず朝は来るんだ。それって、とってもステキなことなんだよ。

それじゃあ、本当に、「この物語の「おしまいの部分についてみようか！

僕らはそれぞれの道をあゆんでいく。ひとりひとりに物語がある。だから、途中で道が分かれてしまつのは当たり前なんだ。

でもね、「それぞれの道」という言葉が、ちょっと苦しくなつてしまつこともあるんだ。だから、今日は一緒に走るつよ。

『道』は川沿いの土手の上にある。もちろん夕日に向かってまっすぐ続いている。青春ドラマの最終回みたいだ。雨降りの日も風が吹きつける日も、もちろん僕は「良い天気」だと思う。でも、まあ、せっかく、みんなで走るわけだし、と秋の夕焼けを設定しました。

僕は上下、学校指定の青いジャージを着ている。足元には、真っ白なスニーカー。からだが驚くほど軽い。これならどこまでだって走れそうだ。

準備体操をする。ゆっくり足を伸ばす、両腕をひらいて、からだを左右にひねる。頭を肩にぴったりつけて、慎重に一周させる。全身があたたかくなってくるのが分かる。

おい、フクオカさんも、こっちにおいでよ。ちゃんとスニーカー、履いてきた？

もちろん、「中学生の「彼女は口紅もしていない。十三歳の彼女をイメージするのは難しい。都会の女の子だから、ジャージは、ちゃんとメーカーものを着ている。」

フクオカさんが走ってくる。僕は自分の胸の白い布に気がつく。ペンで大きく自分の名前が書いてある。ジャージにぬいつけてある。都会育ちのフクオカさんに見られるのは、ちょっと恥ずかしくて、

思わず、布をはがしたくなってしまっ。

すぐに思い直して、やめる。もついいんだ。そんなこと。それに、こんなふうには、何かが恥ずかしいってことも、今は、なんだか懐かしい気分なんだ。

おっと、感傷に浸っている場合じゃない。まずは行動、行動。フクオカさん、用意はできた？ シャーシ姿、似合ってるよ。あ、そうだ、君も早く早く！ 置いてっちゃっぞ。

染み出した黒いあざはどこへいったんだろう？。僕は目を閉じてその位置を確認しようとする。

なぜだか急にチョコレートが食べたくなる。からだか栄養を欲しているのかもしれない。久しぶりのチョコレートは口の中で溶けて、ひろがっていく。僕も、静かにひろがっていく。はじめ、茶色だった液体は、次第に小さく分解され、それぞれが血液の流れに乗って走り出す。次の一歩を支える力となる。僕もゆっくり手を伸ばしていく。つながっていく。小さな力がつながって、僕は支えられ、そして、誰かを支えていく。

遠くで二人が手を振っている。先に行っていていいよ。僕は笑って、わざと大きく胸を張り、ゲンコツで叩くポーズをしてみせる。大丈夫。かけっこには自信があるんだ。

すぐに追いつくから、さ。

僕のハートは心臓にあるんだ。

激しく脈打つこともある。

必ずしも、いつも、自分の思うように、

落ち着いているとは限らない。

だから、僕は走るんだ。

悲しみと、高鳴りに、半分半分、思いをこめて。

走るっ。

いつだって、勇気と、そして、
希望を胸に。